

FD 活動報告

平成 27 年度岩手県立大学盛岡短期大学部 FD 活動報告

Faculty Development Activities in Morioka Junior College Iwate Prefectural University at 2015

岩手県立大学盛岡短期大学部教務委員会
(佐藤恭子^{*1}, 千葉啓子^{*2}, 原英子^{*3})

Academic Affairs Committee in Iwate Junior College
Kyoko SATO, Keiko CHIBA, Eiko HARA

Keywords: Faculty Development Activities, Active learning, communication, Flipped Classroom

FD 活動, アクティブ・ラーニング, コミュニケーション, 反転授業

はじめに

岩手県立大学盛岡短期大学部教務委員会では、平成 27 年度におこなった FD 活動について報告する。

活動は以下の 2 つであった。

1. 教務委員による他大学 FD 活動の視察報告
2. 学外から講師を招き、盛岡短期大学部で、講演会開催。

以下に詳細を報告する。

1. 招聘講師による講演会開催

平成 27 年度の FD 講演会は以下のように行われた。

(1) 開催概要

日時：平成 28 年 1 月 27 日 13:00～15:00

講師：桜美林大学リベラルアーツ学群教授

荒木晶子先生

講演題目：『学習スタイルを取り入れた効果的な授業運営方法』

セミナー概要：(セミナー開催告知案内より)

一昔前とは異なり、最近では、大学や短大にも多様な目的やニーズを持った学生が入学してきます。その学生たちの多様性に応えられる満足度の高い学習環境を提供するために、直接学生とかかわる教員も授業運営にあたって様々な創意工夫が求められる時代になってきました。この講座では体験学習の理論を基に、学生の様々な学習スタイルに合わせた、効果的な授業運営方法をどのようにしたらいいのか、ワークショップを通して考えます。セミナーおよびワークショップ内容：(セミナー開催告知案内より)

- ①コミュニケーションの基礎概念
- ②教員の学習スタイルチェック
- ③四つの学習スタイルとは？
- ④学習スタイルをどう授業に取り入れるのか？
- ⑤まとめ：授業での学生との関わり方とこれからの教員に求められる資質



資料 FD セミナー開催フライヤー

(2) セミナーを終えて

本学部では、FD 活動の一環として、学外から各分野の専門家をお呼びし、毎年 FD セミナーを開催している。

今年度は、近年、大学八王子セミナーで毎年継続して開催されている、新任教員研修セミナーでも講師を務める桜美林大学リベラルアーツ学群教授の荒木晶子先生をお呼びした。先生の御専門は、コミュニケーション理論、異文化コミュニケーション、スピーチコミュニケーションである。そこでセミナーは、学習意欲を延ばしていく効果的な授業運営について、学生と教員間相互のコミュニケーションの上で成り立つことを大前提に、有効かつ興味深い内容が展開された。

セミナーは、ワークショップをまじえて行われ、まず、「学生の多様な個性別の学習スタイル」を知るために、

^{*1} 生活科学科生活科学専攻、^{*2} 生活科学科食物栄養学専攻、^{*3} 国際文化学科

参加教員自身が、それぞれの学習スタイルチェックを自己分析することからはじまった。すると教員の中でも体験をもとに学ぶことを好むタイプ、論理的な思考方法を好むタイプなど、おのおの特異のスタイルがあることが浮き彫りになっていった。セミナーでは、これらの性質を4つのタイプに分類し、タイプごとに向く学習スタイルおよび、授業形式(講義式、グループ・ワーク、エクササイズ、ディスカッションなど)が紹介された。報告者は、自分自身の学習スタイルが、授業構成に色濃く反映されており、「なるほど、学生によっては眠くなる…」というのも納得の結果となった。教員自身が様々なタイプがいることをセミナーで体感した上で、授業の受講側の気持ちになり、多様な授業形式を取り入れる必要性を実感できた。

今日の大学生の多様な学習スタイルが形成されてきた背景には、彼らの幼少期から受けてきた教育が既に、教員の時代とは異なるという点があり、教員自身の育ってきた環境と異なる学習スタイルを持つ学生が増えていることを理解しなければならない。そのような中、一方的な講義タイプの授業だけではなく、教員は、学生の記憶に刻む体験型授業を取りくむ必要がある。しかし、短期大学の限られた2年の間に、資格取得などに必要な科目、および単位数に縛られたカリキュラムを考えると、自由度の高い授業をどの程度取り入れることができるか、非常に難しいところである。今回のセミナーは、学生側の学びへの期待に応え、主体的学びを促す授業、変化する学生へ対応した授業をするため、大変参考になる内容であった。

また、参加者の皆様からは、お答えいただいたアンケートからは、「大変参考になった」、「自分の授業構成の特徴、過不足がよくわかった」、「取り入れたい」などの感想があり、たいへん充実したセミナーとなった。

(佐藤恭子)

2. 教務委員による他大学のFD活動視察

—「大学教育パワーアップセミナー」「体験！学びの仕掛けとその仕組み」第2回「アクティブ・ラーニング型授業と講義型授業の違い～大学におけるオープンな学びから～」参加報告—

(1) セミナー概要

開催日時：平成 27 年 12 月 11 日(金)18:00～20:00

開催場所：学校法人 池坊短期大学洗心館

主催：公益財団法人 大学コンソーシアム京都
教育開発事業部

講師：筒井 洋一 氏(京都精華大学)

セミナー形式：ワークショップ

大学コンソーシアム京都では教員が授業内容や方法を改善し、向上させるための組織的な取組として、1995 年から加盟大学を中心に京都地域におけるFD活動を推進してきた。その中で大学教育パワーアップセミナーは、広く個々の大学教職員の教育(教育支援)活動に役立つテーマを取り扱うワークショップ形式の勉強会として2014 年度に開設されたものである。

(2) ワークショッププログラム

W-1: 反転授業の試行

まず、参加者はパワーアップセミナー受講に向けて、事前に反転授業ビデオを視聴し、確認テストをセミナー講師に回答した。この反転授業の導入意義は、①知識習得をセミナー前にしておくことで、セミナーでは応用を行なえる、②反転授業を知らない者が実際の体験を通して理解することができる点であり、確認テストは正解かどうかより、回答することに意味がある。

2本のビデオにはセミナーで取り組むアクティブ・ラーニングの基礎知識の説明等が収められていて、ビデオ1はセミナー向けの反転授業教材(16分30秒)、ビデオ2は京都精華大学「グループワーク概論」(4分40秒)で、それぞれに確認テストが数問ずつ付いている。

セミナーは、参加者が4～5名ずつのグループを作り、ワークショップ形式で行なわれた。参加者のほとんどは大学教員、大学教育支援部門の職員であったが、アクティブ・ラーニングについて知識がないものが多かったので、セミナーのはじめに参加者に確認テスト回答一覧を配布し、これを参考にしながらアクティブ・ラーニングや反転授業の基礎知識について、次のような簡単な説明がなされた。①アクティブ・ラーニングとは：一方向の講義形式ではなく、学修者の能動的な学修参加を取り入れた学習形式をいう。②反転授業で知識習得を行なう理由：授業では講義をせず、事前にビデオ視聴による予習で得た知識を応用して問題を解いたり、疑問に思っている箇所を個人的に指導したり、互いに意見を交換し合う、対面の学びを充実させる授業方法であるため。③アクティブ・ラーニングが広がったきっかけと今後の進展：国際学習到達度調査(PISA)の2003年調査で、わが国の順位が急落した「PISAショック」以降、学習の質的転換が求められ、学習指導要領が改訂されて探求的な学習が広がりを見せたことがきっかけとなった。現在、アクティブ・ラーニングは大学入試改革とのセットで、詰め込み式の教育ではなく、能動的な学習から成果を得られるよう取り組んでいこうとしているので、今後さらに広がりを見せられると思われる。

W-2:課題についてのグループ作業・発表

1つ目の課題は「どのように授業時間を使っているか」についてで、個人毎に実践しているやり方を述べ、それについて意見や感想を出し合い、より効果的な授業時間のあり方を考えた。反転授業型をやってみた教員はグループ内には居らず、事前学習用ビデオの作成など授業時間以外の作業を考えると踏み切れないと話すものが多かった。一度経験するとそれほど負担ではなくなると講師からアドバイスがあったが、アクティブ・ラーニング導入に当たってはしっかりとした授業デザインを組んでいく必要があることを痛感した。

2つ目の課題は「授業に関する悩みとその解決策」についてで、それぞれの悩みをグループで意見交換し、その中から1つテーマを決め、より良い解決方法を討議した。講義型からなかなか変更するきっかけをつかめないでいる、レベルの違う学生をどう扱うかうまい方法が見つからない、資格を必要とする分野の授業でアクティブ・ラーニングが成り立つか悩んでいる、授業時間の配分をうまく決められない等など、自分自身が持つ授業に対する悩みに極似た内容が多く挙げられた。全員でそれらの悩みに対する解決策について話し合い、今後の各自の授業取り組みにも活かしていけるようアドバイスしあった。

今回のワークショップの主題は、参加者にアクティブ・ラーニング型授業と講義型授業の違いを、体験を通して理解させることであり、グループ作業のもつオープンな授業体制による学修効果を実感させることにあった。学生にどう学ばせたらよいかを知る大変よい機会となったが、120分のセミナーはアクティブ・ラーニングを理解するための初歩の段階と感じたことも事実である。自分の授業に本格的にアクティブ・ラーニングを導入していくとすれば、さらにグループワークを通した体験的な学びについて理解を深めるとともに、しっかりとした授業構想を立てる必要があることを再認識した。機会があれば、また関連のセミナー等を受講したいと考えている。

(千葉啓子)